

下関圏人(=関門人そして山口県人)の訪中アウトバウンド商品実験

—下関市大生の青島観光・研修ツアー報告とその分析—

山本 興治*

【要 旨】本稿は、この報告書の他の5論文と異なって、日本側からの対中国アウトバウンド振興を扱ったものである。報告書が語るべき焦点は、対中国インバウンド振興にあるゆえ、本稿は補論扱いとする。それでも報告書に含めたのは、海外旅行志向を縮小させている日本の若者に、早く海外に飛び出してコスモポリタン思考を養って欲しいこと、またインバウンド振興においてもアウトバウンドとの互惠性を大事にすべき、と考えたからである。

2007年の夏休み、本学の専門ゼミ(3、4年)の学生37名が参加した7泊8日の「青島観光・研修ツアー」を実験商品に見立てて、企画前の思いつきから終了直前のアンケート取りまでを、回顧しながら分析した。往復フェリー仕立の激安ツアーである点など、一般化するには幾重もの注意を要するのは当然だが、中国側の官民インバウンド担当者のみならず、日本側の官民アウトバウンド担当者にもぜひ読んで欲しいと思っている。

まえがき

「日中観光人流分析」と銘打った本調査研究プロジェクトは、この報告書の他の原稿が示すように、日本側のインバウンド(=中国側アウトバウンド)振興分析に偏ったものとなっている。その大半の理由は、資金の都合で中国(青島大学)側からのメンバーが程国慶1名に止まったこと、またメンバー会議を経て、程国慶自身の分担テーマが中国側アウトバウンド(=日本側インバウンド)分析に傾斜したからでもあった。

本章は、その一方的な流れを部分的にでも緩和する意図で、日本側のアウトバウンド(=中国側インバウンド)振興を分析するものである。「平和産業」としての国際観光は、日中観光人流においても双方向性を大切にして互惠的でありたいという思いが、調査の途上でますます強くなった。いわゆる「学生のゼミ旅行」が、訪中(青島)ツアーとして運よく実施できたので、それを実験商品に見立てて分析を試みたい。叙述は回顧風に、事実やその時々を考えを時系列に沿わせた。

1. 発端

1. 1 フェリー・グループの旅行会社との出会い

昨年(2007年)の2月、下関に籍を置くフェリー会社グループの某社長とご面談の機会があって、その折に「グループ内の旅行会社の者です。」と若手社員が同席・紹介された。う

* 下関市立大学

かつなことに、この系列内に独立した旅行会社があることを初めて知ったのだが、同社長は、筆者が下関圏の国際観光振興を調査していることをご存知で、優秀な若手社員を引き合わせたわけである。

同グループは、国内には瀬戸内海航路と日本海航路を持っていて、この旅行会社はまず大阪の本社を拠点に、フェリー利用の国内観光人流を商材とした。その後下関港を拠点に、韓国(釜山)へ、次いで中国(青島)へと国際航路が相次ぎ開設されたが、商材として本筋の国際「物流」とは別に、観光客の国際「人流」に新たな展開を期するため、2年前その下関支店が開設されたわけである。

とはいえ、インバウンド人流については既に日韓航路、日中航路別に下関に本社を置くそれぞれのグループ内旅客会社が商材としていた。それゆえ、この下関支店には韓国向け、そして中国向けのアウトバウンド商材を扱うホールセラー機能が託されたわけである。

後日、この若手社員から下関支店で企画したアウトバウンド商品のピラを見る機会があった。日韓航路、日中航路とも、それぞれ数種類のパッケージツアー試作品ということで、今後、当支店の卸売りテリトリーである中・四国あるいは九州地方の旅行エージェントの反応をみながら、催行実現を図りたいということであった。

その中に「青島ツアー6日 29,800円」という見出しのピラがあって、筆者は眼をむいた。何よりもその激安ぶりに、である。スケジュールもほどよく書き込まれていて、青島滞在の丸2日間は青島旧市街、同新市街ないし郊外と、筆者が既知の観光名所がカバーされている。ホテルは四つ星ないし三つ星仕立のツイン利用、食事も朝夕2食込みと低品質の域を脱して、かつフルパッケージの様相である。問題はフェリー内3泊(往路1泊、復路2泊、2等B室)の過ごし方だが、それは何とかなる。これは実現できる!という「閃き」が走ったことを記憶する。

1. 2 青島大学での日本人向け訪中商品発表会

3月初旬から4月初旬にかけての4週間、筆者は青島大学との交換研修教員として留学の機会を得、当大学を拠点に青島現地、あるいは中国他地域での観光調査を続けた。この間、共同研究メンバーの程国慶とは日常的に接触を続けていたが、同大学旅遊学院(=観光学部)でツアー企画商品の発表会を行うから何か報告をしてほしい、という依頼を受けた。上述の「閃き」が甦って、瞬く間にパッケージツアー商品の構想がまとまった。

3月20日の午前中をつぶして程先生主催の「中日旅遊産品研究討論会」が持たれ、学生・院生4名の他、ゲストとして青島市内の国際旅行社の日本部副部長(後述の劉海宇)と筆者が報告した。冒頭の50分(通訳つき)を与えられ、「下関市大生ゼミ旅行青島8日 39,800円」というタイトルで報告した筆者の試作商品の特徴は、簡潔に以下である(後掲の第1図は、これに修正を加えた半完成品である)。
①学生団体を想定した激安価格であること。
②ビギナーの観光+α旅行であること。
③上述の「青島ツアー6日 29,800円」を同8日に延長して4日目と5日目に「研修日」を加え、両日とも午前と午後にそれぞれ工場見学、学校交流訪問を設定したこと。
④この両日の昼・夕食はパッケージに含めずフリーの食事とする

他、海水浴や市街地散策等自由時間を設定して学生自身での買物や市内バス、タクシー利用を経験させようとしたこと。⑤青島4泊のホテルは2泊づつに分けることによって、新市街と旧市街双方の雰囲気を経験させようとしたこと。

この発表会には、学生に混じって学部長や市内旅行会社の幹部も傍聴されていたが、休憩時間に某旅行社の部長が「先生、あの価格では私たちの儲けが出ないよ!」と苦笑された。さらに後日談があって、この発表会を耳にした日文(日本語)学部の学部長から、3~4年生相手に同内容の講義依頼があった。終了後学生から飛んできた質問は、「逆方向で私たちも下関旅行がしたい。同価格で可能か?」だった。一瞬唾を飲み込んで「日本は高物価だ。2倍は掛からないようにしたいが…」と、歯切れの悪い回答になってしまった。

1. 3 2年目の国際(青島)共同研究計画書

4月初旬の帰国直後に、本プロジェクトを管轄する本学産業文化研究所所長から07年度本研究計画と予算書の提出を求められた。そこでは「前年度の調査経験を踏まえ、青島側では下関のインバウンド誘致一辺倒だけでなく、下関・山口人アウトバウンド希望(=青島インバウンド誘致)が高いことが分かった。確かに、相互の観光『人流』が必要である。」と新たな認識を書き、上述1.2の発表会経験を踏まえた上で「今年度は『山本ゼミ(3年)青島ツアー』として実現したい。この実験を踏まえて、将来的には学年の拡大から全学的ゼミへの拡張、さらにはAキャンパス(注:下関の4大学のこと)レベルの『下関学生夏休み青島ツアー』として定番化することを目論む。」と、やや力んで結んだ。

ここまで、ツアー客である学生の意志が全く未確認のまま、筆者の空想が先行していた。4月中旬、初回の3年生ゼミ授業でツアー計画のあらましを説明し「私が好きになった青島の街にみんなを連れて行きたい。17名全員で参加しよう!」と訴えた。学生の多数は、外国旅行未経験でパスポートも未取得だった。とはいえ、青島大学が本学の姉妹校であること、青島には下関港からフェリー便がある程度のことは知っていて、筆者の訴えへの反応は上々と判断した。

2. ツアー商品の企画

2. 1 本ツアーの趣旨

このツアー商品の企画は、5月の連休頃から始めて5月中にはほぼ完成させた。筆者が、先述のフェリーグループ旅行会社下関支店社員と相談しながら、一部には中国現地の旅行会社や関係者とも相談しながらスケジュールを組み立てていったが、個々のアイテムを論じる前に本ツアーの趣旨を記しておく。

目的は、20歳前後の海外旅行ビギナー学生に、躍動する中国をぜひ体験させたいということである。「鉄は熱いうちに打て!」の鉄則で、刺激度からいって本当は1年生時代がベターだと筆者は思っているが、今の1年生は受験病からの「病み上がり」で扱いも慎重が必要である。また、本学の2年生時は残念ながらゼミがなく、教員と学生の関係が密だという点では専門ゼミのある3年生が勝る。そして、自発的意思による参加という点では、

学内掲示板等を利用した公募がベターだろうが、それで集まるのかどうか不確実で見当がつかない。

団体としては、20人台のツアーがベストと想定した。上述の旅行社は、10人以上なら催行と決めてくれていたが、その程度では姉妹校交流の視点から寂しい。また、30人を超えたら多勢過ぎて、例えば工場見学の場合、行列が長くなって説明が聞こえなかったりする他、万事統率が困難になると考えた。結局は、初めてのことでゆえ催行確実性を優先させて、塊のある集団としては筆者に最も手近な3年専門ゼミ生に訴えることにした。ただし、筆者の3年ゼミ生は17人で、筆者を入れても20人に満たない。また不参加の学生が出る場合も考え、その時は4年のゼミ生にも勧誘することを想定した。

時期について、他の授業に支障のない夏休みで、春学期定期試験直後の8月中旬から9月末の幅を前提とした。青島は、8月中～下旬のビール祭の頃が観光客で最も混み合っただけでなく、ツアー価格も高い。また、市内の海水浴場は9月中も賑わっていて学生にも体験させてやりたいが、これは早めに越したことはない。週3便のフェリー運航日を繰ってみると、出発日は自ずと9月1日(土)に決まっていた。台風シーズンだという不安が頭にはあったが、その自然現象のリスクは如何ともし難く無視した。

価格について、筆者は「サンキューパー (39,800 円) !」という「迫力ある価格」に固執した。1.1で書いたように、旅行社自身は「青島ツアー6日 29,800 円」という試作品を造成しているのだから、あと2日の青島滞在追加料金が1万円ということになる。この2日間は、工場見学と学校訪問・交流の反復だから、両日のホテル代(ツイン利用、朝食込み)、観光バスとガイド料くらいをパッケージ価格に組み込む。昼・夕食は自由行動を優先させて、パッケージから外したわけである。

自由行動時間の設定について、フルパッケージ流儀で旗を持ったガイドに付いてぞろぞろ周るだけではつまらない、できるだけ自由行動時間を設けて学生自身肌での青島体験を!というのが筆者のスタンスである。添乗予定の旅行社若手社員は、当初万一の事故を怖れて、危機管理上全面的な団体行動に傾斜していた。彼自身が経験不足で不安がっていたので、青島大学卒で現地に詳しい中国人留学院生を、通訳兼世話係として同行させることにした。

2. 2 本商品の個々のアイテム

第1図は、7月20日の第2回説明会(後述)で配布した本ツアーの案内ビラである。ビラの中身に即して、特記すべき商品アイテムにつき解説を加えたい。

第1日目(9月1日)の「ブリッジ見学、中国語講座」は本ツアー固有の催しではなくて、フェリー会社の通常のサービスである。食堂は自動券売機による食券方式で、概ね500～1,000円の幅で手軽な日本料理や中華料理が楽しめる。青島ビール大瓶が、免税で200円とはありがたい。ビラでは、宿泊の利用船室は2等Bと最低ランクの大部屋になっているが、女子学生の要望を加えて2段ベッドの2等Aとし、差額はフェリー会社がサービスすることになった。

第1図 学生ゼミ青島ツアー案内ビラ

下関⇄青島
国際定期航路
オリエントフェリー
ゆうとぴあ号で行く

2007年下関市立大学山本・吉津ゼミ
第1回青島観光・研修旅行8日間

日程	スケジュール
1	下関国際ターミナル11:30集合(12:00より乗船開始) 下関港(13:00発)〜中国大陸へ向けての航海〜 UTOPIA(ゆうとぴあ)号〜船内では参加自由型のイベント をご用意。ブリッジ見学、中国語講座、カラオケなどでお過ごし ください。 <食事>朝一:昼×:夕× <宿泊>船中 <船内ゼミを開催予定>
2	〜青島港(16:00入港)〜●青島棧橋〜◆夕食:海の幸豊 かな青島名物の海鮮料理(下関市大 OB 保美氏(観光汽船青 島駐在員)同席予定)一食後ホテルへチェックイン <食事>朝〇:昼×:夕〇 <宿泊>青島:新地大酒店(または東輝国際大酒店)
3	ホテル朝食後一道教の名山● <u>労山</u> (太清宮・虹石)一● <u>青 島市民俗博物館</u> (青島最古の建築物を利用した博物館)一 ◆台東地区で自由昼食一午後、青島市内観光一● <u>青島ビール 工場</u> (中国最初のビール工場で試飲と見学)一● <u>テレビ 塔</u> (町を360度見渡せる、青島一高いタワー)一● <u>観光 汽船青島事務所訪問</u> 一● <u>五四広場</u> (オリンピックのヨット 会場にもなる市民の憩いの広場)一◆夕食:中華風しゃぶ しゃぶ料理 <食事>朝〇:昼×:夕〇 <宿泊>青島:新地大酒店(または東輝国際大酒店)
4	ホテル朝食後一●午前中/ <u>世界の楽器会社・ヘアールの 工場見学</u> 一自由昼食一●午後/ <u>青島旅遊学校との交流</u> 一見学終了後ホテルへ一●自由時間(海水浴も可能)一 <u>自由 夕食</u> <食事>朝〇:昼×:夕× <宿泊>青島:黄海飯店(または東方飯店)
5	ホテル朝食後一●午前中/ <u>繊維企業工場</u> 見学一自由昼食 一●午後/ <u>青島大学との交流</u> 一見学終了後ホテルへ戻る 一●自由時間(海水浴も可能)一 <u>自由夕食</u> <食事>朝〇:昼×:夕× <宿泊>青島:黄海飯店(または東方飯店)
6	ホテル朝食後一ドイツ風町並みの避暑地として有名な青島市 内観光● <u>團島市場見学</u> 一● <u>迎賓館</u> (ドイツ提督の元官邸、 毛沢東も1ヶ月間滞在した)一● <u>青島山砲台</u> (第一次大戦で ドイツが使用した砲台・司令部)一◆ <u>昼食:飲茶料理</u> をご 賞味一● <u>八大関</u> (並木が美しい、西洋風建築の別荘が並 ぶ)一● <u>ジャスコ</u> または <u>カルフル</u> で <u>ショッピング</u> 一青島港 へご案内(16:00頃乗船)青島港(20:00発)〜海路日本へ 〜UTOPIA(ゆうとぴあ)号〜 <食事>朝〇:昼〇:夜× <宿泊>船中
7	〜終日航海(のんびりお過ごしください。船内イベントは、 <u>映画上映・カラオケ</u> を催します。)● <u>船内報告会</u> を予定 <食事>朝〇:昼×:夜× <宿泊>船中
8	〜下関港(09:30入港)入国手続き後解散 お疲れさまでした <食事>朝〇:昼一:夕一

旅行代金
39,800円

■旅行条件■

- 最少催行人員/10名
- 出発日/9月1日(土曜日)
- 利用船室/オリエントフェリー2等B室
- 利用ホテル/青島にて4泊(ツインルーム利用)
三ツ星ホテル(新地大酒店又は東輝国際大酒店)2泊
四ツ星ホテル(黄海飯店又は東方飯店)2泊
- 食事回数/朝7回、昼1回、夕2回(船内含む)
- 港務施設使用料(旅行代金に別途/別途当日現金)
下関港:¥300(15名以上):¥600(15名未満)
青島港:30元(約¥450)

現地交流先、工場見学など現地受け入れ先の都合
等により、行程が変更となる場合がございます。
予めご承知おきください。

ツアー料金

9月/1(土)	39,800円
ホテル一人部屋 追加料金	¥12,000(4泊分)

<旅行代金に含まれるもの>

オリエントフェリー2等B往復・青島ホテル宿泊代金・
中国内観光入場料・中国内現地日本語ガイド代・
食事(朝7回、昼1回、夕2回)
※食事量が×印の部分は自由食となります。

船室変更 追加料金 (往復料金)

特等個室 2名1室利用	¥20,000-
1等個室 2~4名1室利用	¥8,000-
2等 A(下段指定寝台)	¥2,000-

その他、取引条件の詳細等につきましては旅行業務取扱(受託型)旅行業務
に則して行います。当社は当社独自の研修等規定により、お客様が受託
型旅行業務中に急病等の緊急な外傷の事故により、その発生、身体又
は財産に被害を受けた一定の損害について、補償金及び見舞金を支払います。
ただしその損害がお客様の故意、酒酔、運転、故意の損害発生、損害に違
反するサービス提供の遅延、スライディングなどの自然災害等による
ものである場合は補償金及び見舞金を支払いません。また契約書面におい
て、当社の手配による旅行サービスの提供が一切おこなわれないう等と明記
した場合は「当旅行中」とはいたしません。海外旅行業務取扱につき
ましては、お帰国ご自身で大切な領外旅行業務取扱に加入されること
をお勧めします。

<企画・手配>

下関国際フェリーセンター

(株)ヴィーナストラベル 下関支店
オリエントフェリーグループ
国土交通大臣登録旅行業第1101号
TEL: 0832-28-0777
FAX: 0832-24-3006
下関市東大和町1丁目10-60
(関釜フェリー内)
総合旅行業務取扱管理者: 中野洋平/江島俊哉

第2日目(9月2日)は、入港後出迎いの観光バスで青島最大の観光名所「青島棧橋」を経て、新市街地の海岸沿いのレストラン「銀海大世界」で海鮮料理の夕食を取る。この宴には本学OBで、同フェリーの物流を事業とする関光汽船(株)駐在事務所の保美氏が同席する。ビラに記されているホテルは双方とも三ツ星クラスだが、最大の繁華街・香港中路に至近という理由を優先させて「新地大酒店」に決めた。ビギナーでも元気な学生達は、チェックイン後さっそく街へ繰り出すであろう。

第3日目(9月3日)は「観光日」で、郊外の景勝地を巡る他、出来合いの名所や施設が配置されている。昼食は、青島の代表的な下町・台東地区の歩行者天国街で2時間程度の自由散策とした。この日は、かなりタイトなスケジュールとなる(実際には「テレビ塔」訪問が6日目に繰り下げられた)。

第4日目(9月4日)は「研修日」初日で、午前中は中国最大の電器会社で「工場見学」(実際には映写室でのPRビデオ鑑賞と案内役の会社紹介後、各々自由にショールーム室を渡り歩くという行程で、「工場現場」は公開されていなかった)、午後は青島旅遊学校の訪問・交流と単純明快である。後者は約2千5百人が学ぶ観光専門学校(日本の高校年齢相当)で、日本語を学ぶクラスの学生が歓迎してくれる。ちなみに、往復利用フェリー「ゆーとびあ」号の接客乗組員は大半同校の卒業生である。上述筆者が3月の青島滞在時、本ツアーのガイド役を買って出てくれた現地側旅行社の日本部副部長(劉海宇)が案内してくれ、縁ができていた。

なお、後半2日間のホテルもまた、2つの四ツ星ホテルから選べた。風情のある旧市街地の東方飯店も捨てがたいが、旧市街地と新市街地の中間に位置して最大の海水浴場に近いうこと、筆者が経験済みで施設やバイキング朝食が充実していることから「黄海飯店」に決めた。ホテルのチェックインは早めの4時過ぎを予定したから、元気な学生は海水浴に出かけたり海辺を散策できる。7時過ぎからは、1元(=16円)の2階建て市バスで繁華街に繰り出し、2~3班に分かれて自由夕食を取る予定を組んだ。

第5日目(9月5日)は「研修日」2日目で、午前中は繊維工場見学、午後は青島大学へ訪問・交流と、この日も単純明快でゆとりのあるスケジュールである。青島周辺には、日系の水産加工工場や繊維工場が多い。今回は、後述する手配の都合から繊維工場に決めた。また、青島大学は本学の姉妹校で学生の留学交流の他、教員の教育・研修交流もあり、特に日文学部には本学に長期留学された先生が3名もいて心強い。日文学部で上級学生と交流する他、広大な姉妹校の空気を吸わせたいと考えた。この日も研修は早めに切り上げ、夕方以降は自由行動とした。

第6日目(9月6日)は再び「観光日」に戻って、主に旧市街地にある出来合いの観光名所を周る。その前に、青島市民の台所「団島市場」の朝の雑踏を経験させるよう組み込んだのは筆者の強い希望である。帰る間際に、成功店舗「ジャスコ」でのショッピングを予定した。ジャスコは青島で最も賑わう店舗で、学生は前日までの自由行動時間に経験済みだろう(実際そうだったので、現実にはガイドは典型的な土産物店に案内した)。

ところで、学生団体は6日目の夕方のフェリーで帰国の途につくが、筆者はあと1週間青島に残って現地での観光調査を予定した。したがって、帰国船の団体は学生と添乗員だけとなる。船内で取るアンケート票(4節はその分析)を作成して、添乗員に委ねることにした。

3. 募集と手配と説明会

3.1 募集と勧誘

山本ゼミ3年生への募集は、5月の連休前からスタートさせた。果たして女子学生から複数名不参加表明があった。「外国に行くのは不安だ。お金もかかる。国内旅行なら…?!」というのが理由だった。参加者が15名割れ予想になった時点で、予定通り山本ゼミの4年生から参加者を募った。この頃は就職活動たけなわの時期だが、今年は早々に内定者が出て好調の様子である。そうした連中から、参加希望や4年生ゼミ行事希望の声も上がったが、最終的には尻すぼみに終わった。

20名台のツアーにする当初目的から、5月中旬には本調査研究プロジェクトのメンバーである吉津先生に声をかけた。先生自身も、夏休中に青島調査の予定を入れられていたので、筆者同様「ゼミ旅行と連結しないか」とお誘いしたわけである。同ゼミは人気ゼミで、毎年参加者が20名を超えているが、応募の出足は早かったわけではない。しかし、募集締め切り間近の7月中旬頃になって一挙に数が上がってきた。7月末の最終集計では、三分の一程度の4年生を含んで24名の参加となった。

集計して、このツアー参加者は3～4年の両ゼミ生37名、大学院生2名(うち1名は、上述通訳兼世話役の中国人留学生)、それにわれわれ教員2名である(付言すれば、さらに日本側旅行社添乗員1名)。筆者がベストと想定した20名台の目論見からは大きく上の方へずれたわけだが、下の方へずれるのよりもベターと納得させた。

3.2 アイテム手配

旅行会社の立場からすれば、このツアーは「受注型企画旅行」の類に属するだろう。筆者は顧客側のまとめ役として、手配の一部を担当することにした。その部分は、2節で論じた4日目と5日目の「研修日」に集中している。けだし、その前後の「観光日」は、上述のように旅行社自身が出来合いのパッケージ試作品を持っていたから。

まず、5日目午後の「青島大学との交流」については旧知の張・日文学部長にEメール、あるいは電話で連絡を取り学生同士の交流会をお願いした。当方は中国語会話が出来る者が皆無で、そちらで日本語の出来る学生をご準備願いたいとは、かなり虫のいい話ではある。後日、9月の第1週はまだ夏休中であることが判明して筆者はいささか慌てたが、お電話すると「青島在住の学生を集めて対応可能。」ということで安心する一幕もあった(実際は、学生を2教室に約50名集めて下さった他、4名の教員でご応接いただき、学生同士が教室で交流中は教員同士も控え室で、さらに夕食の宴で交流を深めた)。

次に、5日目午前の「繊維工場見学」については、上述、筆者の3月滞在時から暖めて

いた私案があった。青島訪問の度、筆者が一度は必ず立ち寄る「青島日本人会」事務所に、中国の繊維産業リポート風の立派な著書が配架されていた。事務所の方をお願いして借りて帰ったが、著者の分析力が鋭く筆力もあってめっぽう面白い。数日後返却に出向いた折、同じホテル内の一室に著者がいることが分かって早速訪問した。幸い、この S 氏は在室中にご応接いただいたが、日本の大手スーパーの仕入駐在事務所の所長さんで、山東省の他、東北地方をテリトリーとして飛び回っているということである。また、50 歳を過ぎた最近、若い中国女性と初婚されたということで「国際晩婚ストーリー」と副題するご本人 3 冊目、ほやほやの文庫本を贈呈いただいた。

6 月中旬頃、事情をお電話してご協力を願ったら「半日空けて案内する」と確約いただいた。筆者は、青島市街地から遠くなく、学生でも馴染める工場を 2ヶ所午前中に周りたいとお願いしたら、果たして千数百人規模のユニクロ製品縫製工場(実は韓国系の工場)と日本輸出繊維品検査工場を手配してくださった。後日、8 月中旬に山東省は集中豪雨との情報で心配していたら、「当方の取引先工場も水浸しの被害にあった。」という E メールが入ったりして、ご多忙の中、もう一人中国人事務員を同伴されてご案内いただいたわけである(実際、臨場感あふれる工場内を巡回見学できた。ただ機械の騒音もあって、案内役の声は一部にしか届かなかった様子である。往復の観光バス車内では、S 氏からレジュメ付きで中国繊維産業やスーパー繊維商品仕入れについて正直な現状報告を受けたりした。後日再会の折、「最近の学生の関心はあの程度ですか?」と「お叱り」をいただいたが、むべなるかなである!)

筆者自身の手配はこの程度である、2 回の自由夕食は、適当に現地で決めればよい等と考えていたら、8 月になって旅行社の添乗予定者から「4 日目のハイアール工場、および青島旅遊学校の手配はお済ですか?」と電話を受けた。筆者はこの 2 件、旅行社側で手配済みと決めつけていた。2 件とも現地旅行社が詳しいので、そう思い込み確認を怠っていたわけである。聞けば、現地旅行社はランドオペレーター扱いなので、訪問者 1 名につき 3 ドルの手配料が徴収されるということである。結局は、その分下関の旅行社に被ってもらうことになったが、責任の半分は素人手配師の筆者にある。

3. 3 資料づくりと説明会

募集、そして参加予定の学生に対する説明会は、5 月 9 日、7 月 20 日および出発間際の 8 月 29 日と都合 3 回持った。初回の説明会はまだ募集勧誘の色彩が強く、青島市旅遊局で入手済の青島観光 DVD を流し、昨夏、筆者がデジカメで撮影してきた青島生活風景を映写したりした。その後、第 1 図の元になった原案ビラでスケジュールを解説し、かつパスポートの入手手続を説明したりした。

2 回目は 7 月 20 日、学生には春学期の定期試験を 1 週間後に控えた慌しい時期ではあったが、企画責任者としてはこの時期を外せない。旅行社には、当日入金による参加者確定手続をお願いして、パスポート未取得者には改めて手続を急がせた他、持参品アドバイスと旅の注意事項をパッケージして伝えた。筆者が、特に強調したことは以下である。①動

きやすい軽装で、手荷物を少なくすること②学校訪問・交流用に、簡単なお土産をひとり一個持参すること③持参金の標準は、帰国時のお土産を含め3万円であること④自由時間は必ず複数で行動し、班長への連絡網を怠らないこと⑤迷子防止用に、ホテルの名刺をポケットに入れておくこと⑥散策中一番怖いのは、交通事故であること⑦バス、タクシーの乗り方指南と小銭を絶やさないと⑧蠅や蚊はいないが、食品の安全には注意を怠らないこと⑨30程度の単語は学習しておくこと。

合わせて、定期試験終了直後からの「旅のしおり」作成協力者を募集した。が、結果的に応募者は皆無で、筆者がひとりで作成する破目になった。今の学生は現金で、苦勞しそうなことは避ける。本当はそうした訓練で自分が成長し、旅も一層楽しくなるのに…。仕方なく、旅行団の班編成(4名単位、一部3名)と部屋割り(2名単位、一部3名)は吉津先生と相談しながら決めた。先述の持参品アドバイスや注意事項のパッケージ、緊急連絡先を改めて書き入れ、同時に、青島の位置を示す地図や同市の都市概況、経済概況、インフラ計画、青島市の国内あるいは山東省内地位データ、日系企業動向等をジェットロ等の資料からコピーして14頁に仕上げた。裏面は、スケジュールが確定した第1図の本ツアー商品ビラである。

3回目の説明会は、出発3日前の8月29日である。部屋割り・班編成(班長)を確認した他、ここでもパッケージした注意事項と持参品アドバイスを再度強調した。残余の青島市諸概況は自習扱いとした。

4. 催行実現とアンケート調査結果

4. 1 催行実現と予期せぬアクシデント

実際の催行の様子は詳述しない。ほぼ第1図のスケジュール通りに催行されたが、一部の変更は前節までのカッコ内等に記した。また学生の感想は、復路の船内でかなり詳しくアンケートを取ったので次項で検討する。しかし、帰国のフェリー便に大きな変更があったので、このアクシデントにつきここで簡潔に記しておく。

6日目(9月6日)の朝、つまり同日は市内観光後、夕方の船便で帰国する朝のホテルロビーで、添乗員から「フェリーがエンジントラブルで青島入港が遅れる。また着いても乗船できない。」との第1報を受けた。危機管理上も筆者が想定外のアクシデントであったが、起こったことは仕方がない。対応策につき、主催旅行社側の措置が確定し、筆者が了解するまで学生には伏せておき、昼食頃に発表することにした。

午前中、添乗員が観光スケジュールをこなしながら、上述の下関支店との連絡で持ってきた案は以下の通りであった。①全員、2日遅れの別便フェリーで帰国する。どうしても帰国を急ぐ人には、明日の福岡空港着飛行機便を手配するが自費となる。その航空券は、できるだけ格安のものを至急手配する。②2日間のホテル(朝食付き)を手配し無料扱いとする。その他は自費での自由行動となるが、できるかぎり現地のガイドとともに世話する。

③下関支店を通じて学生の親元に連絡する他、各自の国際電話代を保証する。

昼食直後の観光バス内で添乗員がこれを通告すると、学生側から一瞬驚きの声は上がったが、ブーイングは起こらなかった。この頃までには両者に信頼関係が築けた様子に、筆者も安心した。実際学生には、2日延長して儲かった！という反応も多かったのである。なお、飛行機便で帰国した学生は急用のある1名に止まった。

用意された宿は、星不明の格落ちであることは否めないが、こじんまりと清潔なところだった。ところで、6日目の夜(予定では学生の帰国の船出直後)からわれわれ教員2名には調査スケジュールが入っていた。学生の世話は添乗員と中国側ガイド、そして中国人留学生にほぼ委ねたが、実質2日間の「延長戦」につき、学生が概ね満足した様子は、帰りのフェリー内で取られた次項のアンケート調査結果からも明らかである。

4. 2 アンケート調査結果分析

アンケート調査の結果は、第1表に「集計表」としてまとめた。アンケート調査票には28個の設問があったが、本稿では、この調査票の各質問に集計結果を直接書き入れる体裁とした。なお、35名の学生から回答があったが、一部に無回答や複数回答があったりする。

このうち、22問目までは個々の旅行アイテムに関わる5段階評価の設問で、集計表中の「網がけの点数」は、各回答を1～5点と見立てて平均したものである。5点満点で高い点数ほど評価が高いことになる。第2図では、これを20倍し100点満点で分かりやすくした。また、集計表中23～28問目の6つの設問は、旅行全体に関わるものである。そして、意見記入欄の回答は適宜簡略化し、同類の回答には人数を書き入れた。

第1表 青島ゼミ旅行アンケート調査結果「集計表」

今回の旅行のいろいろを、各自が評価してください。今後の参考にします。

5段階評価では①良くなかった②あまり良くなかった③普通だった④まあ良かった⑤大変良かった、のどれか一つに○を付けてください。その下の(欄には、意見を書いて下さい。

1) 事前の説明会や全体の準備=3.5点 ①1人 ②1人 ③19人 ④6人 ⑤7人 無回答1人

(説明会に参加せず済まなかった—フェリーの揺れや延泊の可能性の事前通知が欲しかった—事前説明は良かった—用意すべき資金の説明良かった—説明会日を早めの通知して欲しかった

2) 往復の船の中の食事=2.46点 ①4人 ②16人 ③10人 ④5人 ⑤0人

(カレーがレトルトだった—往路は味薄い、復路は美味しい—往路の接客悪い—往路は良くない—復路の方が良い—サービス良かった—味合わない—満腹—朝食の日本食良かった—値段高い3人

3) 往復の船の中の寝室=2.91点 ①1人 ②10人 ③17人 ④5人 ⑤2人

(居心地良かった2名—よく寝れた5名—寒かった2名—ベッドが硬くて寝れなかった—機械音がうるさい—電気がつかない—毛布が汚い

4) 往復の船の中の行事=2.91点 ①2人 ②7人 ③19人 ④6人 ⑤1人

(自分は不参加7名一面白かった一自己紹介が良かった2名一自己紹介は聞こえなかった一中国語会話教室が良かった5名一操舵室見学が良かった4名

5) 青島入港直後の夕方の青島観光=3.52点 ①0人 ②0人 ③12人 ④10人 ⑤1人

無回答12人 (珍しいものが一杯一海岸沿いが良く期待が膨らんだ一ホテルに直行で観光なし?一疲れていた
のでホテル直行良かった

6) 青島初日の海鮮料理夕食=3.29点 ①0人 ②8人 ③13人 ④10人 ⑤4人

(お腹が痛くなった一口に合わなかった5名一脂っこい一美味しかった3名一店員が怖かった

7) 青島初日・二日目のホテルの全体的印象=3.37点 ①0人 ②7人 ③11人 ④14人 ⑤3人

(立地がよく買い物に便利6名一部屋が広い2名一綺麗だった3名一朝食バイキングが良くない3名一ホテル周
辺の悪臭が気になった一簡易ベッドはきつい一ドライヤー、冷蔵庫なし

8) 青島二日目のシャブシャブ夕食=3.23点 ①0人 ②8人 ③14人 ④10人 ⑤3人

(美味しかった3名一タレがだめ2名一タレが微妙5名一豚肉と羊肉両方が食べた一野菜が美味しい一楽しい食
事形式だ3名一美味くなかった

9) 青島二日目の観光の全体=3.81点 ①0人 ②1人 ③11人 ④13人 ⑤7人 無回答3人

(労山は楽しかった5名一ビール工場楽しかった6名一全部良かった3名一台東地区散策良かった一博物館見
学は意味不明一自由時間が少ない一集合が悪い一ビール工場で飲みすぎた一悪いところなし、全体的に満足3
名一スケジュールがハードだった5名

10) 青島三日目のハイアール工場見学=3.74点 ①0人 ②0人 ③15人 ④14人 ⑤6人

(日本を上回るハイテクぶり5名一企業戦略が聞けた一展示が楽しい7名一値段が高くてびっくり一製造現場を見
たかった

11) 青島三日目の旅遊学校視察=4.29点 ①0人 ②1人 ③5人 ④11人 ⑤17人 無回答1人

(交流が楽しかった12名一バスケットが楽しかった一ビデオ紹介よりも交流時間が楽しい一日本語が通じなかつ
た2名一中国の印象が良くなった一お土産をうまく渡せなかった

12) 青島三日目の自由夕食=3.83点 ①0人 ②2人 ③10人 ④15人 ⑤8人

(安い、美味しい10名一注文しすぎた2名一量がでかい一餃子タレが微妙2名一ピンクのタレがきつい3名一食
べたいものが食べれなかった

13) 青島三日目・四日目のホテルの全体的印象=4.49点 ①0人 ②1人 ③1人 ④13人 ⑤20人

(とても良い一部屋がきれい9名一朝食良かった4名一海が近くて良い一市街から遠いがバスが楽しい一周辺が
寂しい2名一風呂とトイレが良くない

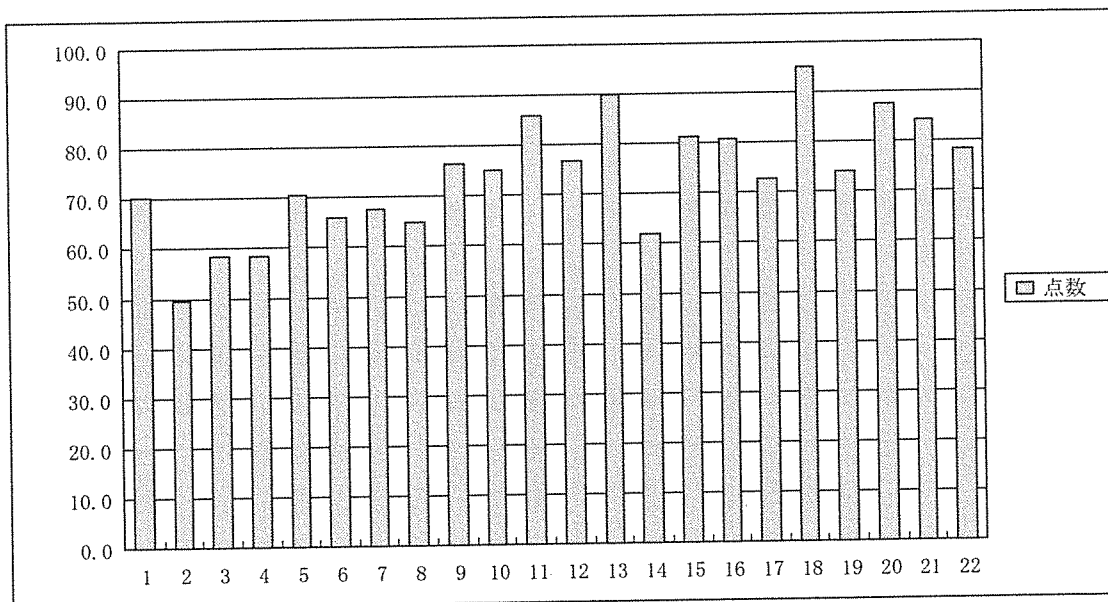
- 14) 青島四日目の繊維工場見学=3.09点 ①0名 ②11人 ③13人 ④8人 ⑤3人
(ユニクロの現場が見れて感動5名—工場の規模がでかい—現場に人が多い—現場の人の声が聞きたかった—
中国人の労働は大変だ2名—佐々木さんの説明が面白かった—工場での説明が聞こえず—楽しくなかった
- 15) 青島四日目の青島大学視察=4.06点 ①1人 ②1人 ③7人 ④12人 ⑤14人
(交流できて良かった、楽しかった12名—学生は日本語をよく勉強している4名—大学が大きい4名—構内食堂
での昼食が良かった3名—プレゼントは直接渡したかった—視察の目的がはっきりしていない
- 16) 青島四日目の自由夕食=4.03点 ①0人 ②2人 ③10人 ④8人 ⑤15人
(とても安くて美味しい4名—屋台の串とビールが良い3名—楽しい3名—好きなものが食べれた—ケンタキー、
カップ麺をテイクアウトしホテルの部屋で食べた2名—本場の中華料理に満足—ジャスコで満足の食事
- 17) 青島五日目の青島観光の全体=3.62点 ①0人 ②3人 ③13人 ④12人 ⑤6人 無回答1人
(市場に活気があった2名—市場の雑踏は怖かった—訪問先が多くて疲れた4名—ドイツの砲台跡が良い—海辺
のウェディング撮影が見れた2名—昼食の飲茶が美味しかった2名—露店の買い物が楽しい—夕立の雷怖かつ
た
- 18) 青島のガイド=4.74点 ①0人 ②0人 ③2人 ④5人 ⑤28人
(親切で優しい2名—ユーモアがあった—感謝あるのみ—相談に乗ってくれて親切—最高だった—説明が上手で
面白い—私たちより日本のことを知っていて脱帽—日本語が上手—人柄がすばらしい
- 19) 青島の市バス経験=3.69点 ①1人 ②7人 ③6人 ④9人 ⑤12人
(1円で安い6名—思ったより綺麗—日本のバスより広い—良い経験だった3名—快適で面白かった4名—タク
シーより安くて便利—1元のバスと2元のバスの違いが不明—タクシーが良い—運転が荒い3名—少し怖かった
- 20) 青島での自由時間経験=4.37点 ①1人 ②1人 ③2人 ④11人 ⑤20人
(出歩いて楽しかった—露店が楽しい—有意義だった—楽しい買い物ができた—買い物が安い—時間が不足—タ
クシーが怖かった—ガイドさんに案内してもらって満喫できた—怖い所もあったが面白かった—2日間延びて結果
的に良かった
- 21) 青島での買物=4.2点 ①1人 ②2人 ③3人 ④12人 ⑤17人
(物価が安い—値切るのが楽しい—面白い経験だった—難しかった—日本語も英語も通じない
- 22) 青島での自由昼食=3.91点 ①0人 ②2人 ③9人 ④14人 ⑤10人
(スープが美味しい—探索が楽しい—日本と違ったマクドナルドとケンタキーが美味しい3名—色々な店に行けた
—注文が難しい
- 23) 大きな声で挨拶できたか？ お礼が言えたか？ ①言えた=24人 ②まあまあ=10人 ③言えず=1人
(返答があって気持ちよい—コミュニケーションが楽しい—コミュニケーションが難しい—謝辞と多少銭が通じた—
言っても返事がなかった—筆談ができた

- 24) この旅行価格を評価してください。①超安い=17人 ②安い=18人 ③まだ高い=0人
(2日延びてさらに安くなった一値段以上のサービスがあった)
- 25) 団体旅行は何人位が適当だと思いますか？ ①50人=1名 ②40人=12名 ③30人=14名
④20人=6名 無回答2人 (バス1台分が適当一楽しければ何人でも良い一説明が聞こえなかった一今回は多すぎた一ガイドや通訳が大変そうだった)
- 26) また青島に行ってみたいと思いますか？ ①ぜひ=7人 ②機会があれば=24人 ③もう行かない=4人
(もっと話がしたい一もう一度青島の街並みを楽しみたい一行ってない所に行きたい一青島以外にも行ってみたい一今回は北京一強い思い出になった一ゼミで行くことに意味があった一食事が合わず衛生的に無理だった)
- 27) この旅行は何年生の時が良いか？ ①1年生=1人 ②2年生=8人 ③3年生=24人
④4年生=6人 無回答3人 (毎年でも良い一1年生以外一何年生でも良い3名一中国語を習いたての2年生が良い一2~3年生が時間の余裕があって良い一卒業旅行の4年生でも良い)
- 28) 今の満足感を聞かせて下さい？ ①大満足=18人 ②行ってよかった=17人 ③つまらなかった=0人
(最高の旅一素晴らしい思い出一2日延びて良かった)

* 最後に、満足点と改善点など何でも余白に書いてみてください。

(添乗員の江島さんに感謝一アクシデントへの素早い対応に感服した一2日間延びて行きたい所に行けて良かった一自由時間が楽しい一自由時間を増やしてほしい一ゼミ仲間、他ゼミとも仲良くなれた、もっと交流したい一フェリーの揺れはきつい一往路のフェリーのトイレが汚い、風呂の改善、ご飯がまずい一ガイドの劉さんや留学生の趙さんがすばらしかった一マッサージや露店が楽しかった一スケジュールに余裕が欲しい一中国語も勉強しておくべきだった一事前の中国勉強が大事だ)

第2図 アンケート集計図 (第1表の1~22の設問を100点満点換算)



以下、この集計表(第1表)、および集計図(第2図)に関わる筆者の感想を簡潔に記す。

まず、個々のアイテム評価につき、集計図から60点以上を一応の合格点とすると、22個のうち19個(86%)が合格点となった。不合格の3個は、全てフェリー内生活に関するものであった。また、70点以上は15個(68%)、特に80点以上は7個(32%)と、それぞれ高評価を得たと判断する。個々にはみないが、全体的に「人的交流」や「自身体験」の要素が強いアイテムほど評価が高い、と判定可能だ。

最後の部分の旅行全体に関わる評価について、ツアー終了間際の満足感につき「大満足」と「行ってよかった」で折半、「つまらなかった」は皆無だった。また、旅行商品価格については「超安い」と「安い」でこれも折半、「まだ高い」は皆無だった。端的に、この激安ツアーは成功したといえるだろう。とはいえ、青島リピートについて「ぜひ」は7名と2割に止まり、学生ビギナー層においては、当分浅くても広いツアー展開が希望されているという結果が出た。

今後は睨んで、青島ツアーは「何年生の時が良いか？」については圧倒的に3年生時(62%)、「適当な旅行人数は？」については30人以上が82%と、それぞれ筆者が指向するベストとは異なる結果が出た。この点、教員と学生では状況と認識が違うということでもあろう。

5. 教訓と本ツアー商品の拡大再生産

これまで、本ツアーの「閃き」から催行実現直後のアンケートまで、半年以上の経緯を回顧しながら分析を進めてきた。最後に、一応「成功」と総括した本ツアーを教訓化し、その「拡大再生産」の可能性を追求して、いくつかの論点を示唆したい。

本ツアーは1個に具現された商品に違いないが、その特徴は①大学生のゼミ旅行である②フェリー仕立の激安ツアーである③スケジュールが青島限定である④時期が夏休みである⑤ツアー・メニューが観光+研修+自由行動の組合せである、と分解可能である。順次、簡潔に教訓化してみよう。

1) 本ツアーは、市大上級生(3・4年)のゼミ旅行であった。2つの「専門ゼミ」生に呼びかけたにすぎない。それゆえ、まず30数個ある他の専門ゼミに拡大できるだろう。また、専門ゼミはないが2年生、そして1年生と学年が下がるほど将来性が見込めて教育効果あり、と筆者自身は考えている。さらに、市大生に限らず、青島と下関が姉妹都市であることを活用して市内の他大学生、また山口県が山東省と友好県であることを活用して県内他大学生に拡大可能である。

こうした大学生限定の広域化とともに、より年齢を下げて市内あるいは県内高校生の修学旅行への展開、あるいは年齢の大きく上げて学習意欲も高い退職高齢者ツアーへの展開もありうる。この場合、各々の旅行の形態や内容につき、本ツアーとは異なる工夫が必要だろう。確かに、大学生のツアーと異なる面もあるだろうが、内容的には本ツアーのバリエーションに留めることも可能である。そして、対象の相違や広範化とともに、募集の形態に変更を要することは当然である。

2) 本ツアーは、下関(海)港発のフェリー仕立であることに最大の特徴がある。これは外せ

ない原則だから、目的地への往復に時間を要するというデメリットは甘受しなければならない。この点は、国内出発地の広域化に難があるという点にも連続している。

とはいえ、船旅での海外旅行だという希少性が、激安価格というメリットに直結しているのである。当然ながら、飛行機便ではこの価格にならない。学生ツアーなら、船内を教室と見立てた工夫もせずに、ただ往復の時間が退屈だった、というだけでは情けない話だ。確かに、本ツアー実験で合格点に達しないアイテムは、船内生活に集中していた。企画者は独自で、あるいはフェリー(旅行社)側の協力もえながら、娯楽を含めて船内時間を工夫、充実すべきである。

付言して、パッケージに含まれたホテルや夕食等、個々のアイテムの品質は概ね妥当であり、敢えてこれ以上高価のものにする必要はない。ただし、それでも2008年夏が北京五輪という事情、それに絡んだ中国経済のインフレや外国為替状況から、ツアー価格の上昇を覚悟しなければならない場合があるだろう。

3) 本ツアーは現地4泊とも青島限定で、周遊性に乏しい(5日間で約2~3百キロ)ことに特徴がある。それは既述のように、2日間の「研修日」を重視したからである。ちなみに、現地4泊なら孔子の曲阜、名山の泰山、省都の済南と約千キロを周遊する「山東省コース」の方が一般的で、これが大きく割高というわけでもない(ガイド、運転手の宿泊代+ガソリン代+名所施設入場料代程度)。それでもそうしなかったのは、ひとえに学校交流訪問や産業工場見学を必須としたかったがためである。学生もそう希望するだろう、という筆者の独断である。実際、青島は、若者4泊の滞在(今回は偶然にも6泊の滞在)に耐えうる街であった。

とはいえ、ツアーの趣旨が異なれば、もちろん山東省コースもありえる。また、このフェリー会社グループでは2007年8月末、週1回往復の蘇州(太倉)航路の運航を開始したから、下関~青島-上海・蘇州~下関(逆ルートも可)のツアーも可能になった。ここでは、日中間往復の海路を違えて中国内2地域の観光を楽しめるが、現地4泊ではかなりタイトで、かつ青島-上海間航空便利用ならかなり割高になる。上海(蘇州等を含む)観光は、福岡空港など九州の空港から格安のツアーが豊富にあるので、別個に旅行したほうが得策だと筆者は思う。

4) 本ツアーが9月1日出発になったのは、本学の学校暦と現地の観光シーズン事情に拠る。冬休みと春休みは時期とその性格、および「寒い」という季節性から避けたい。海洋都市青島は、夏が素晴らしく開放的な観光シーズンで、ビール祭りの超多忙期(ツアー価格高額期)を一山越えた9月が最適である。台風シーズンであることは度外視して、9月中のツアーなら何時出発でも良い。複数の数十人のツアーが、毎週(あるいは毎便)出発することも可能である。

5) 青島現地のツアー・メニューにつき、本ツアーは観光+研修+自由行動のバランスがうまくいった。このうち2日間の「観光」については、現地旅行社が習熟していて、第1図の3日目と6日目のアイテムが妥当な線である。一部不人気なアイテム(例えば博物館)は外

して、その分人気のある「自由行動」に当てれば良い。

一番努力を要するのは「研修」メニューの充足と、個々のアイテムの手配である。今回は、世界的に著名な電器工場、ならびに日本で商品ブランドが有名な縫製工場、そして2つの学校交流訪問と目論み通りであった。ただし、企画者の意図と現地の実際、あるいは学生の感想にはそれなりのずれがある。

それ以上に注意を要するのは、学生ツアーが定例化され頻度が増せば増すほど、個々のアイテム手配が大変になるという矛盾である。ハイアール見学のように、「産業観光」が日常化している(反面、ショールーム巡りで製造現場を見せずつまらなかった)アイテムはともかく、日系工場や学校などはその都度手配しなければならない。これが結構大変で、受け入れ側も毎年、何度もというわけにはいかないだろう。研修対象のアイテムについては、ジェトロ青島事務所や青島日本人会等を通じて開拓しファイルする他ない。開拓は現地の旅行社とともに、である。

宿泊アイテムについて、4泊を2泊づつに分けて体験させたことは正解だった。ただしその後の筆者の体験で、青島近郊には農漁民の所得増(村おこし)と都市民のレジャー充足を狙って、「農家楽」や「漁家楽」という民宿ツアーが開発されている。繁華街から1時間とかけられない地域だから、市内での4泊の1泊を割いて、田舎の民宿を楽しむのも良い。

最後に、自由行動について。パッケージ食と自由食の割合を含めて、適当だったと思う。この時間を増やすことは、確かに諸リスクとトレード・オフである点が否めないが、万事管理・監督づくめは旅行の趣旨の根本に反する。自由行動時間のリスク回避については、その分だけ周到の準備でマネジメントを図る他ないであろう。 (2008・2・11 脱稿)

追記：この旅行商品実験では、その思いつきから企画と造成、募集や手配、そして催行実現からアンケート調査まで様々な皆さんにお世話になった。いちいちお名前を記しませんが、ここで厚くお礼を申し上げます。